

11. ポット鉢付苗造林

1 試験担当者

造林部造林第1研究室：土田恭次

北海道支場造林研究室：林 敬太（昭和43年度より担当）

2 試験目的

造林事業における労働力の季節的偏りを平均化することは労働力確保の点から重要な問題である。従来は下刈り事業に難点があつたが、薬剤利用や機械化のため問題は解消され、逆に植付作業に問題が移行したようである。この解決方法の一つとして、植付時期の拡大をはかることが考えられる。ここでいう、ポット鉢付苗は、鉢付によつて活着を容易にし、植付時期の拡大をはかるうとするものである。

3 昭和43年度の経過とえられた結果

1 沼津署管内においてプラスチックポットの根系発達に及ぼす影響について植栽後2～3か年経過した造林木を調査した。

スギについては地表部から不定根が発生発達するので、著しい生長を示すものもあるが、その反面発生のおくれているものは上長生長も劣る。

ヒノキについては不定根の発生がみられないが、造林後の生長は一般植栽苗と比較して著しく劣るということはなかつた。

2 神楽、深川、帶広、白糠、陸別署管内においては、ジフィポット苗と、普通苗植栽について、地形、土壤条件が均一で、同一植栽法で同時に植栽された造林地において、両者の初期生長を比較調査したが、初期生長に格段の差は見られなかつたが、活着についてはポット苗の方がよかつた。

4 昭和44年度の試験計画

管林局署の共同試験として次の項目を実施し、苗木の成長、とくに根系発達の状況をチェックして作業方式を検討する。

1 試験設計の検討

2 育苗および生長調査

3 山出し後の生長を促進させる植栽方法の検討のため圃場において植栽試験を行ない植栽方法別の生長を追求する。

4 ポット苗による周年植栽の最適のポット移植時期ならびにポット養苗期間の決定のための

試験を行なう。

(5) ポット苗用畑土に代る培地による。

養苗と山行後の活着生長を調査する。